

情報の海を上手に泳ぐ その1

今年は花冷えという言葉がぴったりするような春を迎えています。3月26日の夕食時、NHKのテレビは全国に向けて「静岡市では桜が満開となりました。」と報じ、駿府公園のお堀に垂れ下がって咲く桜を映し出していました。それなのに、次の日の気温は最高が12.9度。明けて28日も、雲がどんより垂れ込めて、やはり前日と同じ12.9度。さらに次の29日は、なんと伊豆では雪、静岡でもあられが降る始末。そして、30日。明け方の気温は0度2分まで下がり、日中も快晴なのに10度1分までしか上がりませんでした。夜桜見物としゃれ込んだ人たちは、どんなに震え上がったことだろうと、考える私までもが身震いするほどでした。

ところが、26日のテレビは、この予想外の冷え込みまでは報じませんでした。ですから、映像を見た多くの人たちは、静岡は暖かい所、静岡はのどかな所という先入観も手伝って、「そうか、静岡はもう満開か。静岡っていいなあ。行ってみたいなあ。」と、まだ見ぬ静岡に思いを馳せたことでしょう。静岡を一度も訪れたことがないのに抱くこの思い。これはこの人たちがこれまでに得たいくつもの情報によって、形成された思いです。もちろん紛れもなく静岡はいい所です。一訪一住の価値大あります。住んでいる私自身がそう思うわけですから、テレビの画面を見た人たちがそう思っても全く異論はありません。しかし、この人たちの思いと私の思いの間には、実は大きな隔りがあるのです。それは実感、納得の度合いの違いによって生じる隔りです。

花便りに限らず、私たちは今、新聞、テレビ、ラジオを通して、居ながらにして日本はおろか世界中の様子を知ることができます。特に、テレビは映像を伴いますので、臨場感は抜群です。先日のハイチ大地震やチリ大地震の折には、私たちは夕食の箸を口に運びながら、地球の反対側で泣き崩れる人々の姿を、まるで隣に居合わせているかのように見てとることができました。実はこのとき、私たちは錯覚という大きな落とし穴の淵に立っていたのです。

私たちは、ハイチやチリ全土の100万分の1、いや1億分の1も見えていないのに、あたかもすべてを見たかのような感覚に見舞われます。被災状況の極一部しか見ていないのに、まるで全部を知ったかのような思いに包まれます。これが錯覚です。錯覚はやがて思い込みを誘発します。そして、時として私たちに心配と焦りをもたらします。この心配と焦りは、与えられた情報に関わること、しかも不安を誘うようなことを多少なりとも知っていて、しかもその種の情報に常日頃から非常に高い関心を抱いているときに起こります。

こんな例があります。3月13日、グルジアの民放テレビがロシア軍侵攻の仮想ニュースを放映しました。事実と思った国民はびっくり仰天、大パニックに陥りました。すぐに訂正の放送がなされましたが、国民の恐怖は収まりません。ご記憶の方もおありでしょうが、この大パニックが、今述べた「情報に関する不安面の知識が多少なりともあって、しかも関心が非常に高いとき」にあたります。グルジアの人々は日頃からロシア軍侵攻の不安を抱いていたため、ニュースの真偽を確かめる余裕などどこかに吹き飛んでしまって、大パニックに陥ってしまったのです。

これほどまでではないにしても、これに似た心境になるときが、みなさんにもおありでしょう。たとえば子育てに関して一抹の不安を抱いているとき、あるいは、子どもの教育について何か心配な向きがあるとき、気がかりになるような情報を耳にしたら焦りを感じませんか。現代は情報化社会です。日々おびただしい数の情報が私たちに押し寄せてきています。ややもすると、私たちは情報の渦に巻き込まれ、押し流されてしまいます。情報の海を上手に泳ぎ、パニックを未然に防止し、ゆとりを持って子育てをしていく。そんな子育てライフをしていくにはどうしたらよいか。次号に続くことにいたします。